様式 2

番号 ＼ 観点	発行者の番号・略称	使用学年	教科書の記号・番号	教科書名
	4・大日本	第 1 学年 第 2 学年 第 3 学年	理科・728 理科・828 理科・928	新版　理科の世界 1 新版　理科の世界 2 新版　理科の世界 3
取扱内容 （学習指導要領の総則及び各教科、各学年の目標、内容等）	○　第 1 分野 第 1 学年では、水中の物体に働く力の大きさを調べる実験などの活動や、ワインを熱してエタノールを取り出す実験などの活動、第 2 学年では豆電球の前後を流れる電流の大きさを調べる実験などの活動や、酸化銅から銅を取り出せるか調べる実験などの活動、第 3 学年では、エネルギーの移り変わりを調べる実験などの活動や、酸性やアルカリ性の水溶液を混ぜた液の性質を調べる実験などの活動、家庭等で使っているエネルギーの総量を調べるなどの活動を取り上げ、目標を達成できるようになっている。 ○　第 2 分野 第 1 学年では、花の種子になる部分の観察やコケ植物などの体のつくりの観察などの活動や、火山噴出物の火山灰や火山れきの観察などの活動、第 2 学年では、メダカの尾びれの毛細血管の観察などの活動や、天気図を基に高気圧や低気圧付近の風の流れを調べる実習などの活動、第 3 学年では、孫の代への形質の伝わり方を調べる実習やなどの活動や、太陽の 1 日の動きの観測などの活動や市街地や雑木林で野鳥の種類や個体数を調べるなどの活動を取り上げ、目標を達成できるようになっている。 ○　知識・技能の習得、活用、探究 第 1 学年では、鏡に反射した光の進み方を調べる実験レポートを作成するなどの知識・技能を活用する学習、日本列島がプレートを押し合ってできていることについて理解するなどの発展的な学習、第 2 学年では、身近な植物の観察レポートを作成するなどの知識・技能を活用する学習、水が得た熱量は水の質量と上昇温度で決まることについて理解するなどの発展的な学習、第 3 学年では、環境の異なる場所での野鳥の観察レポートを作成するなどの知識・技能を活用する学習、電気分解に必要な電圧について理解するなどの発展的な学習が取り上げられている。			
内容の構成・排列、分量等	○　内容の構成・排列 第 1 学年では、身近な物質や気体の性質についての活動の後に、温度を変えたときの物質の状態変化についての活動を取り扱い、第 2 学年では、動物の生命維持の仕組みについての活動の後に、動物の行動の仕組みについての活動を取り扱い、第 3 学年では、太陽や星の 1 日の動きについての活動の後に、星座の 1 年の動きについての活動を取り扱うなど、系統的・発展的に学習できるよう工夫されている。 ○　内容の分量 第 1 学年～「第 1 分野」は 136 ページ、「第 2 分野」は 125 ページ、「資料等」は 24 ページであり、総ページ数は 285 ページで、前回とほぼ同様である。 第 2 学年～「第 1 分野」は 146 ページ、「第 2 分野」は 137 ページ、「資料等」は 24 ページであり、総ページ数は 307 ページで、前回とほぼ同様である。 第 3 学年～「第 1 分野」は 142 ページ、「第 2 分野」は 141 ページ、「第 1 分野と第 2 分野の共通ページ」は 10 ページ、資料等は 40 ページであり、総ページ数は 333 ページで、前回より約 6%増となっている。			
使用上の配慮等	○　コラム「くらしの中の理科」などにおいて、日常生活との関連や科学の話題を紹介し、科学の有用性などを伝えたり（全学年）、章末の見開きページにおいて、野生生物の生息地として釧路湿原を紹介したりするなど（第３学年）、生徒の学習意欲を高めるための工夫がなされている。 ○　巻末の「課題研究・自由研究にチャレンジしよう」において、自由研究の方法やテーマを掲載したり（全学年）、「単元末問題」や「読解力問題」などにおいて、学習内容を復習できる確認問題や活用問題を設けたりするなど（全学年）、生徒が主体的に学習に取り組む工夫がなされている。 ○　生徒がこれまでに学んできたことを確認することができるよう、「思い出そう」マークを付し、既習事項を示したり（全学年）、安全に対して配慮が必要な場面では、該当する箇所に「注意」マークを付し、黄色の枠内に注意文を掲載したりするなど（全学年）、使用上の便宜が図られている。			
その他	○　北海道に関連のある資料は、「昭和新山の誕生」など、第 1 学年で 11 箇所（うち上川管内 1 箇所）、第 2 学年で 2 箇所、第 3 学年で 2 箇所取り上げている。 ○　環境に関連する事項については、「環境マーク」を付けるなどして自然環境と人間のかかわりの学習を通して、環境保全の精神を培えるよう工夫している。 ○　日常生活での体験等の体験活動を取り扱い、「やってみよう」「Let ’s Go 博物館・科学館」などを通して、自然に対する総合的な見方を養えるよう工夫している。			